

月刊

# 日 土 技 術

二十一世紀に生きる我我、真に必要なものは週末力である。(哲学者)

## 週末なににする？

TAKE FREE



we are weekenders.

- 東村 奈保
- 大西 淳浩
- 村上しほり
- 〇I〇I (オイオイ)
- 岡本かの子
- keema (キーマ)
- 東 朋治
- 河北航太
- 桂 枝之進
- 吉川公二

tr.g.s

June 2022 6

アーベント

表紙 the rocket gold star

## 日本全国放課後三昧

サブスク沼の恐怖と魅惑

東 朋治



Aマゾンプライム。私の晩酌時間および週末を一変させた危険と魅惑に満ち溢れたサブスク沼である。

昨年(2021年)のGW頃テレビが壊れ、ひたすら自宅時間はラジオの時間。それはそれで豊かな時間とも言えたが、さすがにツラくなり、半年以上たつて買い替えた。新しく買い替えたテレビのリモコンにはAマゾンプライムをはじめ複数のサブスク系ボタンがあった。

ラジオデイズの期間にWi・Fi環境を整えたこともあり、2022年4月になつてからアマプラの世界に足を踏み入れた。それまで、配信とか定額見放題などというシステムに恐ろしくて近寄れなかった。私は縄文人なので、さっぱり分らないからである。

滅多にAマゾンなどを利用しないが、以前利用した際に知らぬ間にプライム会員になつていた。そもそもあまり利用しないので私には不要な特典だが、解約手続きが面倒くさいこと、月500円(たし

か)という会費は「まあ、いいか。面倒だし」と放置させる絶妙の料金設定だった。

私はパソコンで動画を観ることが苦手である。画面は小さいし、仕事と関係ない時間はパソコンから1mmでも遠く離れたいからである。

恐る恐るテレビでアマプラボタンを押した。……。そこには、無間の魅力が広がっていた。割と新しいドラマや映画が膨大なラインナップで会員特典(見放題で追加料金なし)だった。

私は「映画は映画館で」という信念を持ち続けていた。その絶対的信念が揺るぎ始めた。

私の多すぎる信条のうち「段取りが9割」というものがある。

責任者は当日バタバタせず、のんびり本場で談笑したり、会場を冷やかしがてらにホタホタ見廻る程度が、順調な催し。責任者は、トラブル発生時だけ動けばよい。

日本でもかなり前にドラマ版がブレ

クし、映画版も公開された『特攻野郎Aチーム』。ハンニバル率いる無鉄砲な特殊部隊4人組が、危険極まりないミッションをこなし、世界の平和維持に暗躍する。痛快なアクション映画である。

ドラマ版を見たことがない私は、行き当りばったりで無茶をしながらミッションをこなしていく映画だと思ひ込んでいた。ところが鑑賞して、驚いた。段取りを最大限重視し、現実性はともかく緻密な作戦を立てているのだ。

当然のように段取り通りに事が運ぶことはなく、絶体絶命の窮地に襲われる。

9割の段取りと、1割の不確実。この不確実がドラマを盛り上げる。イベントでもしかり、すべてが予測通りに進むものではなく、時には考えられないような突発的トラブルに見舞われることもある。その際、段取りが不十分だと、突発的トラブルに対応できない。そのためにも、9割の段取りが命。10割を目指す必要はない。

主演は名優リーアム・ニーソン氏。圧倒的な存在感である。渋い演技派と思つていたが20年以上前に『スター・ウォーズ エピソード1』に主演したあたりから、アクション映画にかなり出演している印象を受ける。『96時間』では主演と

して強烈なアクションを見せつけた。

冷静沈着なリーダーという設定とは思えぬ暴れっぷりで個性豊かな面々を従え、困難なミッションをこなしていく。特攻野郎ではあるけれど私は「段取り野郎」という印象を受けた。

私も心の中では特攻野郎で在り続けたのだが、どうしても段取り重視を選択してしまふ貧乏な性格である。

『みんなのいえ』も20年以上前に劇場公開された三谷幸喜監督脚本のコメディ。

新婚夫婦が郊外に家を建てる。せっかくだからモダンでオシャレで快適な家に住みたい。嫁の友人の人気デザイナー（内装専門）に依頼をするが、施工部分を嫁の父親に依頼する。ところが、嫁の父親はいわゆる「大工」。社長ではなく「棟梁」と呼ばれている昔堅気の頑固者。

工事着工前から、斬新なエリートデザイナーと頑固棟梁が激しく意見を対立。右往左往する新婚夫婦。騒動を繰り広げながら、新築の家が建てられていくというストーリーだ。

この作品を見て、私は店舗誘致の際の内装工事を楽しみ思いました。

建築士や設計士が、工夫と才能を凝縮した夢のある設計図面を広げる。クライアント（依頼主）の意向を取り入れ、微

修正を施し、内装工事に着工する。しばらくすると、繁盛間違いなしの魅力に満ち溢れた店舗が完成しバンザイ、ということは何とんだない。

1点目に立ちほだかる壁は、予算。設計デザイン側は、こだわりを随所に散りばめたい。必然的にコストが増加するのでクライアントが難色を示す。

2点目の壁は、施工技術。山小屋や簡易な木造建築ならともかく、建築基準法が厳しくなり耐震構造の強化がより求められる現在、「工務店の社長」ではなく「大工の棟梁」にすべてを委ねるのは、かなりの不安が伴う。

工務店でも大工でも、技術と同程度に法律知識は必要となる。「ケムリ感知器？なんだそりゃ」とか言ったら、消防検査等の際、許可が下りない。

3点目は、設計側の現場認識不足。いざ完成すると、尺が合わない、構造的に水漏れが止まらない、入り口の真ん前にヘンなオブジェができて店内に入れない。無数にある。

大切なのは、前向きなコミュニケーションである。予算内で設計側と施工側がガツチリとタッグを組み、主張と妥協を繰り返しながら、ほどほどの落とし所の物件を仕上げていく。

頑固棟梁を演じるT中邦衛氏の存在感は、演技を超越するほど高みに達している。あまりにもナチュラルで、完全に他を圧倒。見終わってから知ったのだが、T中氏、撮影が終わるまでこの作品がコメディ映画と知らず、ガチ演技を続けていたそうである。

これからますますサブスクの世界は深く広がっていくだろう。危険と魅惑に満ち溢れた底なし沼。抜け出すことはあきらめ、快楽に身を委ねることが賢明なのかもしれない。

（あづま・ともはる）

## 東朋治

株式会社商業タウンマネジメント代表取締役

一九七四年神戸市長田区生まれ。製鉄工場勤務を経て神戸新長田地区の震災復興に十年以上従事。二〇一〇年大阪府内のシンクタンクに転職。

二〇一七年(株)商業タウンマネジメント設立。

中心市街地や商店街活性化、新規創業者伴走支援や空き店舗対策、名物づくり、被災商業地域の復旧復興、商業施設再整備及び運営など北海道から沖縄まで活動中。趣味は読書、映画（館鑑賞、そして全国津々浦々の訪問先でその地の皆さまと酒を酌み交わすこと）。

